

学校教育目標	【勉学・健康・自律・礼儀・奉仕】の精神のもとに「知・徳・体」の調和のとれた健全な生徒の育成を目指す
《本年度の重点目標》	
《重点目標1》	「知・徳・体」の調和のとれた健全な生徒の育成を推進する
《重点目標2》	活気に溢れ、生徒一人一人が生き生きと明るく「安全で安心」な学校づくりを推進する
《重点目標3》	家庭及び地域社会に「開かれた学校」、保護者、地域から愛され、信頼される学校づくりを推進する

◆記入にあたっての留意事項

- 別紙『2019（平成31）年度「指導の重点」全体構想』に示している重点項目から各学校・園で重点においた取組について記載すること
- 取組については、各学校の重点目標達成のための方策に応じて設定すること
- 小・中学校においては、スクールプランに位置付けている「学力向上に関する取組」、「体力向上に関する取組」、「その他学校独自で設定した取組」を必ず位置付けること
- 評価の例
A…目標を十分に達成できた B…目標をほぼ達成できた C…あと少しで目標が達成できた D…目標達成までいかなかった

取組	評価項目	評価項目についての重点的取組	評価	○成果と◆次年度に向けた改善点
学力向上に関する取組	【授業改善】 ◇質32「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。」について、肯定的な回答をした生徒の割合[55%以上]	【「授業構想シート」「よい学び方ハンドブック」を活用した授業改善】 ○学力体力向上推進担当者が、「授業構想シート」を活用しながら、「話し合い活動」の質の向上に重点を置いた授業研修を行い、全教員がそれを基に実践する。【学期に1回】 ○学力体力向上推進担当者が、生徒の「振り返り」の評価基準を作成し、各教科の評価に組み込み、指導に生かす。【単元の終わり】 ○全教員が、「よい学び方」ハンドブックに立ち返った授業改善を図る。【単元の始めと終わり・随時】	A	○生徒質問紙(質32)については、授業改善の取組より、肯定的な回答をした生徒の割合が増加し、目標を達成することができた。 ◆ベア学習や4人組による「話し合い活動」を充実させたが、学力向上には至っていない。しかし、抽出した1学級において「朝読書」の時間に音読・暗唱に取り組みせ脳を活性化させたところ、1学期から3学期の定期考査にかけて分析した結果、文系教科において成果が表れていた。今一度検証していく必要性があるが、学習する教科に脳を切り替え活性化させるためにも、次年度は、授業の始めにドリルなどに取り組みむ時間を設定し、授業の流れにおいてベクトルをそろえて取り組む。そこで、授業力向上推進部が、授業の流れを示した「富野中学ひのスタンダード」を作成し、実践する。 ◆4人組による「話し合い活動」の課題としては、特定の生徒の発言で結論が決まったり、話し合いの中で発言できない生徒がいたりする。次年度は、課題解決のために学力体力向上推進担当者が、「よい学び方」ハンドブックにグループ学習の進め方などをまとめた「学びを深める「グループ学習」」の項目を新たに加え、4人組による「話し合い活動」を充実させる。また、「話し合い活動」によって、どれだけ学力向上につながる成果が出るのか、項目を「授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思う」に変更し、小テストなどを使って検証する。 ○「今年度、ICTを活用した授業をどの程度行ったか」について、学期に1回以上の使用が57%（2学期）から64.3%（3学期）に、月に2回以上の使用が0%（2学期）から28.6%（3学期）に増加し、タブレットを活用した授業の推進を図ることができた。 ◆次年度は、よりICTを活用した授業を推進するために、授業のどこでタブレットを活用した授業を行うのか、教師が分かるように「ICT年間学習指導計画」を4月中に教科部会で作成し、実践する。
	【数学科での授業改善】 ◇「数学の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いていますか」について、肯定的な回答をした生徒の割合[65%以上]	【ノートに自分の考え・他の人の考えを書く活動の充実】 ○生徒一人一人が、「めあて」「まとめ」をノートに、「振り返り」は「振り返りシート」に書く。【毎時間】 ○数学科教員が、数学ノートフォーマットを作成し、生徒一人一人が自分の考え・他の人の考えをノートに書けるようにする。【毎時間】 ○数学科教員が、「授業構想シート」を活用し、解き方や考え、問題を解決する過程が分かるような構造的な板書を行う。【毎時間】 ○全教員が、「よい学び方」ハンドブックを適宜活用する。【随時】	A	○生徒質問紙(質36)については、肯定的な回答をした生徒の割合が増加し、目標を達成することができた。 ◆目標を達成することはできたが、解き方や考え、問題を解決する過程が分かるような構造的な板書とは言えない。数学科教員は、板書とノートの関連を図るために「数学ノートフォーマット」を作成し、ベクトルをそろえて実施する。さらに、授業の導入時にドリルなどを行い、授業の切り替えをさせるとともに、基礎学力の定着や脳を活性化させる取組を実施する。 ◆(質62)「数学の授業の内容はよく分かる」は、北九州市の平均を下回っている。これは、生徒自身が分からないところが分かっていないことが要因の1つだと考える。そこで、数学科教員は、これまで学習した内容について4月にテストを行い、理解していない単元を把握させる。そして、学力定着サポートシステムを活用した「算数・数学検定問題集」を作成し、より発展した問題が解けるように富野タイムを使って全教員できめ細かく指導する。また、数学科教員と生徒会学習委員とが連携して、「富野中学校数学検定」を実施するなど、富野タイムを活性化させる。
	【学力定着】 ◇「学校の授業時間以外に1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」について、「1時間以上している」と回答した生徒の割合[50%以上]	【富野タイム・富野ノートによる家庭学習の充実】 ○補充学習の時間「富野タイム」の充実 ・授業力向上推進部が、4月に北九州学力定着サポートシステムの年間活用計画を作成し、生徒の実態に合わせた「基礎」「標準」「発展」問題の学習プリントを準備する。【毎日】 ・授業力向上推進部が、「放課後質問教室」と「富野タイムコンテスト」を企画し、全教員で実施する。【学期末】 ○自習学習ノート「富野ノート」の充実 ・家庭学習推進部が、生徒に自主学習のポイントを提示し、生徒が自主学習ノート「富野ノート」をより継続して取り組めるようにする。【毎日】 ・各教科担当が、北九州学力定着サポートシステムを活用して、生徒の実態に応じた家庭学習の課題を準備する。【適宜】	A	○生徒質問紙(質14)については、肯定的な回答をした生徒の割合が増加し、目標を達成することができた。 ◆目標を達成することができたが、47%の生徒が1時間以上家庭学習を行っていない現状がある。各教科から課題を出し、富野ノートに取り組みせ、各教科の「主体的に学習に取り組む態度」の評価に組み込むことで、家庭学習の習慣化を図る。 ◆文章を読み取る力や文章を書く力を身につけるために、各学年・学級で「朝読書」の活動に取り組んでいる。本年度は、朝から頭を活性化させるために、国語の「音読・暗唱ハンドブック」を作成し、1学級抽出して2学期から「朝読書」の時間を使って実施した。その結果、国語・社会・理科・英語の4教科において成果が表れた。次年度は、全学年において「音読・暗唱ハンドブック」の活用を図る。
体力向上に関する取組	【授業改善】 ◇<生徒質問紙(19)> 「体育の授業は楽しいですか。」について、肯定的な回答をした生徒の割合[85%以上]	【授業規律改善と体力向上プログラムの活用】 ○「ヘリソンモデル」を活用した授業規律改善を継続して行う。【毎時間】 ○北九州市体力向上プログラムを活用し、学習する競技や種目につながる補強運動や柔軟体操に取り組みせ、楽しく効果的な体づくりを行うとともに、生徒の「できるようになりたい」「うまくやりたい」という気持ちを高めていく。【毎時間】 ○実技小テストの結果をもとに、競技や種目に応じたグループングを行い、生徒同士の「教え合い活動」の充実を図る。【競技・種目に応じて】	B	○生徒質問紙(質19)については、学期末アンケートの結果、目標を下回ったが徐々に数値は高まっている。 ◆次年度も、「ヘリソンモデル」を活用した授業規律改善を継続して行う。そして、ウォーミングアップの際は、音楽に合わせて「北九州市体力向上プログラム」を活用し、楽しく効果的な体づくりに取り組みさせる。また、競技や種目に応じてグループングを行い、ICTを活用しながら生徒同士の「話し合い活動」「教えあい活動」の充実と質の向上を図る。 ◆生徒質問紙(質19)は、4年間取組を充実させ、成果と課題を検証してきたが、取り組む競技や種目に左右されるという課題が見られた。そこで、次年度の体力向上に関する取組は、種目と競技の組み合わせの見直しを行うとともに、全国体力・運動能力・運動習慣等調査の項目にある「話し合い活動」「ICTの活用」「振り返り」に変更し、生徒の「できなかったことができた」「教えてもらってきた」という達成感や仲間との協力意識を高めていく。
	【運動習慣】 ◇<生徒質問紙(6)> 「学校の体育の授業時間以外でも運動やスポーツを行っている。(※60分以上行う割合)」について、肯定的な回答をした生徒の割合[70%以上]	【情報発信・成果の見える化の充実】 ○体力向上推進部が、保健体育科通信の発行や長期休業期間中の課題を出し、家庭での運動に対する意識を高めていく。【学期に1回・長期休業期間中】 ○体力向上推進部が、体力づくりに関する成果や情報を発信する掲示板「体力アップコーナー」の充実を図る。【随時】 ○全教職員が、生徒に積極的に声をかけ、部活動の加入率を上げていく。【随時】	B	○生徒質問紙(質6)については、目標を達成することができなかった。 ◆「体力アップコーナー」の充実により、授業時間以外の運動やスポーツの推進を図ることができている。次年度においても、「体力アップコーナー」を活用しながら、生徒の運動に対する興味・関心を高めていく。また、保健体育科通信の発行や長期休業期間中の課題により、家庭での運動習慣を図る。 ◆部活動の加入率を上げるために、次年度においても、対面式での部活動紹介や新入生の保護者への啓発活動を実施していく。しかし、生徒質問紙(質6)(質13)は、家庭学習の時間が増えるにつれて、運動時間が減少している現状が見られるため、この項目は次年度削除し、授業改善に重点を置いて取り組む。
心の育ちに関する取組	【授業改善】 ◇<生徒質問紙(3)> 「将来の夢や目標を持っていますか。」について、肯定的な回答をした生徒の割合[75%以上]	【自己肯定感を高める授業づくり】 ○全教職員が、日頃の学校生活において夢や目標をもつことの大切さを生徒に話し、各教科で成就感や達成感を持たせられるような授業づくりを行う。【随時】 ○道徳の授業では、生徒の実態に合わせて少人数指導やTT指導を行い、内容項目「希望と勇気、克己と強い意志」に重点を置く。【毎時間】	A	○生徒質問紙(質3)については、肯定的な回答をした生徒の割合が増加し、4年間で初めて目標を達成することができた。次年度においても、全教職員が、日頃の学校生活において夢や目標をもつことの大切さを生徒に話し、各教科で成就感や達成感を持たせられるような授業づくりを行う。 ○道徳担当者は、生徒の実態や行事に合わせた「ローテーション道徳」「TT指導」ができるように、4月に「道徳指導年間計画」を作成し、実践する。また、普段の指導が深化できるようにするために、道徳主任と学力体力向上推進担当者とが連携して、道徳の授業づくり研修を行う。 ○今年度の総合学習発表会において、富野中学校では初めて「合唱コンクール」を実施し、学級が一体となるために挑戦し続ける生徒の姿があった。また、「本物を見せたい」という思いから、大衆演劇と北九州市立高等学校ダンス部を招待し、卒業生である先輩たちが踊る姿に生徒たちは魅了され、「自分も先輩たちのように後輩に何かを残せる人になりたい」「北九州市立高校でダンスがしたい」と目標をもった生徒が多数いた。中には、これがきっかけとなり、今のままでは志望校に合格することができないため、放課後残って学習する生徒もいる。次年度は、北九州市の平均を下回っている生徒質問紙(質2)「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦している」の項目を増やし、学校行事や学級活動を通じて、生徒の挑戦意欲や向上心を高めていく。
	【授業改善】 ◇<生徒質問紙(1)> 「自分には、よいところがあると思いますか。」について、肯定的な回答をした生徒の割合[50%以上]	【ベクトルをそろえた全校生徒への取組の充実】 ○全教職員が、ポジティブ発言をしていくことで、生徒の学習意欲や自尊感情、向上心などを伸ばしていく。【毎日】 ○心の育ち推進部が、生徒の言葉をポジティブに変えていく研修を行い、全教職員で実践する。【学期に1回】 ○スクールカウンセラーによる対人スキルアップ学習や「北九州子どもつながりプログラム」を活用した学習を年間計画に位置付け、系統立てて実施し、生徒の自己理解・自己肯定感を高めていく。【学期1回】 ○全教職員が、生徒指導主事が提示する「全校生徒の取組」と人権教育担当者が提示する「メッセージポスター」に沿って生徒に話し、生徒指導主事・支援加配・授業規律推進部・生徒会とが連携しながら、自他を思いやるような全校的な取組の充実を図る。【授業では毎時間・取組は学期に1回】	A	○生徒質問紙(質1)については、肯定的な回答をした生徒の割合が増加し、4年間で初めて目標を達成できた。次年度も継続して、全教職員がポジティブ発言を行い、生徒の学習意欲や自尊感情、向上心などを伸ばしていく。また、スクールカウンセラーによる対人スキルアップ学習と「特別の教科 道徳」、「北九州子どもつながりプログラム」の活用の充実により、自己理解・自己肯定感を高めていく。 ○本年度も、生徒指導主事が提示する「全校生徒の取組」と人権教育担当者が提示する「メッセージポスター」に沿って、全教員が毎回の授業で生徒に話し、自他を思いやる生徒の育成を図ってきた。次年度においても、生徒指導主事・生徒支援加配・生徒会が連携し、継続して取り組んでいくことで、自分や自分以外の人(友達、家族等)を大切にする生徒の育成を図る。 ○小学校の頃から学習に対して苦手意識を持っている生徒やどうせやってもできないという自己肯定感の低い生徒が多い。そこで、本年度は、富野校区の学力・体力向上と小中連携を図るために、小学6年生と中学1年生とで競い合う「富野校区コンテスト」を実施し、生徒にやればできるという達成感を持たせることができた。次年度も継続して行い、生徒の挑戦意欲と協力意識を高めていく。